



明日だけラムネ色

吉野万理子 さく

たかおかゆみこ え

万引きは初めてだった。

前にも経験していたら、少しは自信を持って手を伸ばせるんだろうか。

ぼくはTシャツのサイズを確認した。120、130、140というのはたぶん身長のことだろう。だとしたら、140でいいんだな。

別に、明るい色だったら、本当はなんでもいい。サンブルがハンガーでぶら下げられた壁際を、もう一度確認する。レモンイエローもまぶしいし、黄緑色もわるくない。

けれど、もしも一枚お母さんが買ってくれるというなら、絶対にこれを選びたい。

ラムネ色のTシャツ。

水色より、すきとおった感じのする布地だった。入口の

扉が開きっぱなしの店なので、蒸し暑い空気がじわりと入り込んできているけど、このTシャツのまわりだけ、少しげだ。

店員はひとりだけ。おじさんとお兄さんの中間みたいな男の人で、髪が肩まであって黒縁の眼鏡をかけている。カーキ色のTシャツに黒いパンツをはいていて、足元はサンダルだ。さっきまでTシャツを並べ替えていたが、ドアの向こうに引っ込んで、もう三分くらいもどってきていない。だから今がチャンスなんだ。

思い切って左手をTシャツの上ののせて、140を確認して引っ張る。でも値札が目に入って、ビクッと静止してしまった。千七百円。道端でたまたま百円玉を拾う、という奇跡に十七回出合わないと払えない金額だ。店員さんだ